

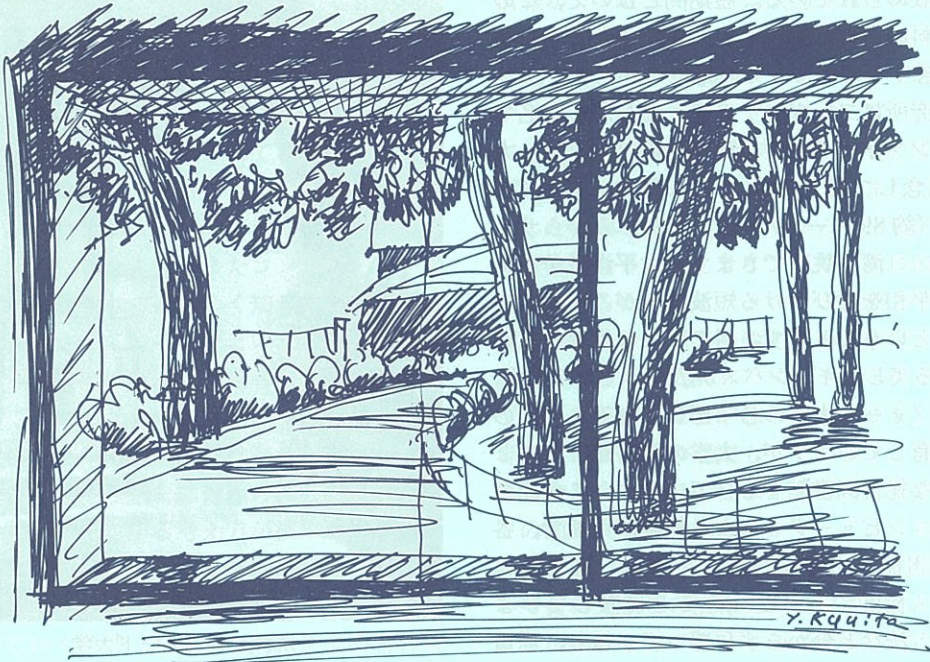
図書館だより

1991. 7. 5

第13巻2号

通巻118号

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library



緑蔭七月

國田祐作

頭上の木じりじり茂る大暑かな 潤一
「アイリスへの手紙」という映画があった。学校に行かぬままオトナになった青年が、恋人に文字を習う。覚えた嬉しさに町の図書館で手当たり次第、大声で本を読み上げるあたりがクライマックスに仕立ててあった。カメラはさりげなく、この図書館のモットーを写していた——「どんな建築家も書物より生き延びるモニュメントを建てなかった」。

昔の図書館は開架式ではなかったから、請求し

た本がどんなものかは手にとるまで分らなかった。相手が小学生であろうと、閲覧票に記入された書物は奥の書庫から確実に運び出された。イナバの白兎と大黒様を期待していた小学生の前に、恐しく部厚い古事記の本が差し出される。それは中味においても全く恐ろしい本であった。逃げても逃げても追いかけてくる異形の神々たちの悪夢に子供は脅える……。

書物の世界は沈黙のささやきに満ちた記念碑の林立の風景を想像させる。

図書館を一步出れば緑蔭。多かれ少なかれ彼岸の世界と付き合ってきた後で、この世の風景は懐しさに溢れているはずだ。

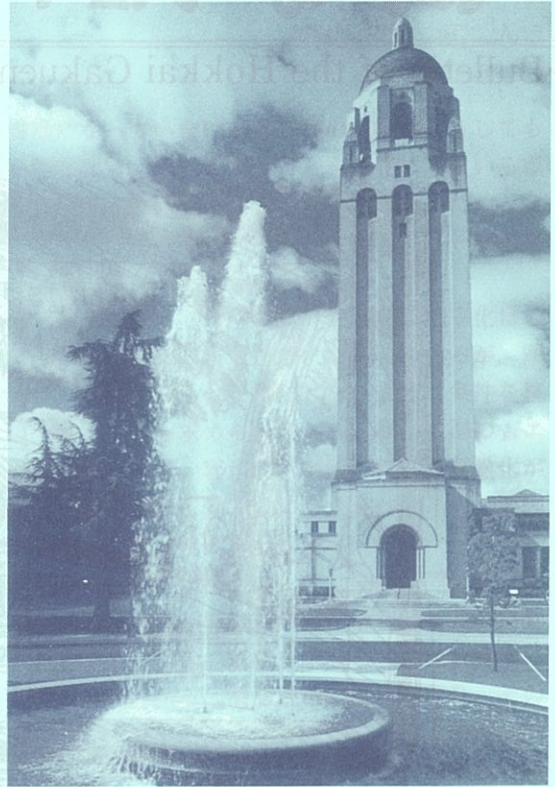
(くにた ゆうさく 教養部教授)

機会があって、昨年まで約1年ほどスタンフォード大学のフーヴァー研究所に留学した。この研究所の正式名は「戦争・革命・平和に関するフーヴァー研究所」であり、世界史の激動を物語る資料が収められている。短期間とはいえ、この貴重な資料の一端に触れることができたことは歴史研究を志すものにとって最高のチャンスでした。

この研究所はフーヴァータワーとしても有名です。スタンフォード大学の卒業生のフーヴァー大統領を記念して建てられたこの塔は、高さ285フィート（約89メートル）で、てっぺんからサンフランシスコ湾が眺望できます。太平洋戦争中には日本へ平和を呼びかける短波放送がこの塔から行われたということです。目の下には世界一広いといわれる美しいキャンパスが広がっております。

スタンフォード大学の各学部はそれぞれ専門の図書館を有していますが、大学の図書館として2つの大きな総合図書館をもっています。この総合図書館はコンピューターによる検索が可能で、各学部の図書館とも連結されています。図書館はサービス機関であるということに徹しています。操作方法など分からず戸惑っていると、係員の人々がすぐ飛んできて懇切丁寧に指導してくれます。そして雑誌に掲載された目的の論文を検索してくれた後、私の研究目的を聞いて、レファレンスコーナーに行ってより詳しい指導を受けるようアドバイスしてくれます。アメリカはどこの図書館に行ってもこのレファレンス業務が充実しており、特に院生や留学生の専門的研究にとっても役立っています。アメリカの論文では参考文献の欄がとても重視されているのに、講義やゼミナールでは参考文献をあげないでいることに疑問を抱きましたが、図書館に行ってこの疑問も解けました。図書館のレファレンス員が学生諸君の勉強のガイド役を果たしているのです。

ライブラリアンとはこうした専門的知識を身に付けた図書館員のことをいいます。スタンフォードでは大学のお金で図書館員がライブラリアンの資格を取るために研修に出されるそうです。本や



スタンフォード大学

論文の内容についてのスペシャリストですから、たんなる図書館司書とは違います。その大学の教授とも密な連絡を取って利用者の便に供しています。こうしたライブラリアンをたくさん揃えている図書館がよりよい図書館といわれています。日本の筑波大学の図書館員がフーヴァーに研修に来ていましたが、専門の書物を集めて専門の研究員が利用する形になっている日本の大学図書館のおおよその実態に比べて、専門の図書を集めているからこそ専門のスペシャリストを擁して、専門的知識を勉強したいとする入門者に的確なアドバイスを与えながら専門的研究の道へと導いていくガイド機構を備えているアメリカの大学図書館のあり方にとっても感激していました。北海学園もぜひ図書館員の研修制度を発足させて、図書館の新しいイメージ作りに取りかかるべきであろう。

図書館はサービス業務であるということについては、図書カードの工夫についてもいうことができる。私が訪問した大学および研究所の図書館はほとんどコンピューター化されていましたが、ロビーにはやはりカードボックスが備えつけられていました。しかし、日本のように著者名とか書名とか分類とかいったカードボックスではなく、著者名、書名、分類、および件名が一つになったカードボックスで、カードがアルファベット順に並べられたものです。このカードはとても便利で感心させられました。どんな書物もこのカードで見つけることができましたし、そうした検索の過程でほかの参考文献も見つけることができました。コンピューターが導入されてもその操作に不慣れなもののために、さらにコンピューターの画面に打ち出される膨大な同一著者や書名といった情報を簡便化するために、またコンピューターに入力された情報をさらに詳しく知るために、図書カードを存続させているのだということです。利用者にとって最善の方法は利用者自身が決めることであって、そのために図書館は機能しているのですとフーヴァーの図書館員は誇らしげに話していました。筑波から来た図書館の人とアメリカと日本では図書館に対する考え方が根本から違うのではないかと話し合いましたが、彼は日本でもそうした考えの人はたくさんいるが、そうしたことを実行していく条件（財政的な問題や上の者の考え方など）が日本にはなさすぎると嘆いていました。私も全く同感です。

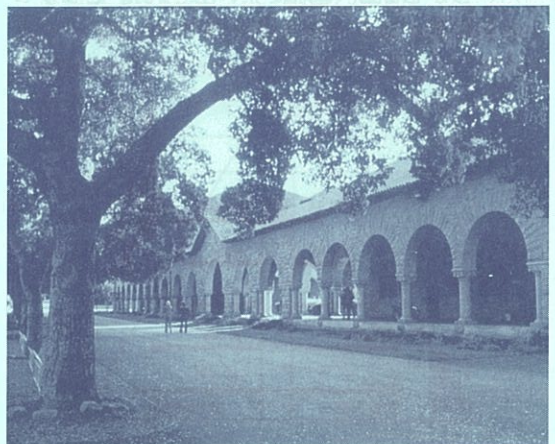
フーヴァー研究所の一部の図書館でしたが、分類記号による分類を簡素化して、この記号をロケーション記号化しているところがありました。アメリカではこうしたところが増えてきているそうです。分類による書物の振り分けが極めて困難になってきている現状は、アメリカも日本も同様です。しかも、コンピューター化によってかなりの書物の検索が可能になってきており、また、図書カードも分類化を必要とせず一本化されてきているときに、もっとも必要なことは検索された書物を確実に手にいれることです。その本があることは分かったが、どこにロケーションされているか書庫内を右往左往するようでは困ります。分類記号をロケーション記号化して、書庫内を合理的に使用し、書物の保存位置を明確にしておりま

す。登録された書物の登録番号順に書物を配置しているところもあります。慣れてきますと、このロケーション番号を見て、どこのスタックスの何列目の棚のどのあたりに目的の書物があるか分かるようになります。とても便利なのに驚きます。

また、アメリカの研究所や大学ではアーカイブスをもっています。専門のアーカイヴィストがいて文書についてのレファレンスのほか専門的にアドヴァイスをしてくれます。資料内容についての情報がコンピューターに入力されていましたが、カードやパンフレットも完備されており、利用者に応じて目的の文献リストをコピーできるようにサービス態勢を整えています。アーカイヴィストは自分でも資料を読み、得られた情報をコンピューターに向かって入力していました。毎日そうした仕事を続けていますから利用者が得る情報も豊富になります。ライブラリアンの仕事も利用者に供するためのレファレンス業務です。専門的図書やアーカイブスを備えている研究所や図書館ではこうした専門的なライブラリアンやアーカイヴィストが必要だと、私も痛感します。こうした専門家は図書等の選定もしています。教授等と連絡を取り合ってこの仕事をするのですから、すべての面で長所が発揮されます。アメリカのアジア学会では、こうした図書専門家の分科会をもっていて資料文献等の情報交換もなされています。

私が経験したアメリカの図書館事情を紹介しました。もちろん条件が異なることはいうまでもありませんが、長所は長所として、いくらかでも参考になればと思います。

(にしかわ ひろし 経済学部教授)



それにしても遅い“知求の春”

1929年、50歳をアインシュタインはちょっとした別荘騒動の中で迎えた。記念に贈られるはずの別荘は結局自分の貯金をはたいて買うはめになった。

こちらは1991年「そうじき片手に知求を歩く」毎日。ようやく「相対性理論」の入口にたどりついたが、なんとも遅い“知求の春”ではある。

なぜなのか？ 相対性理論が難解に見えるのは。

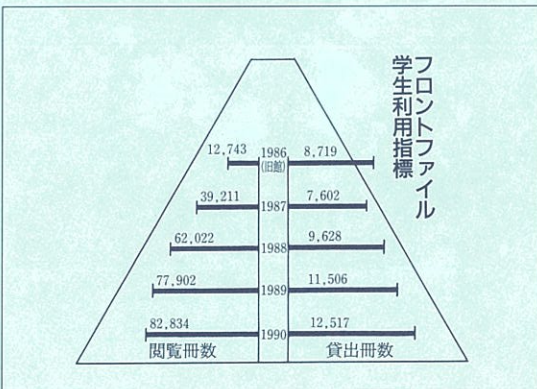
アインシュタインはノーベル賞を船の中で聞きそのまま日本に上陸したのが1922年(大正11年)である。大正のデモクラシーの時は一般に「ロマンの高揚期」とされているが「科学の興奮」の時代でもあったのだ。その後多くの啓蒙書が出たにもかかわらず「相対性理論がよそよそしい」ものであったのはなぜか？

相対性理論は2つから成る。一つは「特殊相対性理論」。もう一つは「一般相対性理論」だ。前者はヨコの「等速運動」を、後者はタテの「加速度運動」を扱う。これらを説明する基礎公理は「光速は不変(30万キロメートル)」というものである。前者は「素粒子論」へ、後者は「宇宙論」を解くカギとなった。

「特殊相対性理論」では「運動する物体内の時間はゆっくり進み物自体が収縮する」という。多くの啓蒙書はこの二つを説明したあといきなり公式の $\sqrt{1-\frac{v^2}{c^2}}$ を持ち出してくる。そこではなぜその公式が出てくるのか説明されていない。

もし多くの解説書や啓蒙書が「ピュタゴラスの定理」がこの不可解な時空も貫かれているということ述べるならそれは100万の人によって知られずすべての小、中、高校生によって知られるものとなるはずなのだが皆一様に難解から難解へと逃げて行く。

今まさしく「アインシュタイン・ロマン」の時代だ。しかし5000年前に見い出された「ピュタゴラスの定理」はまさしく最大のロマンだ。



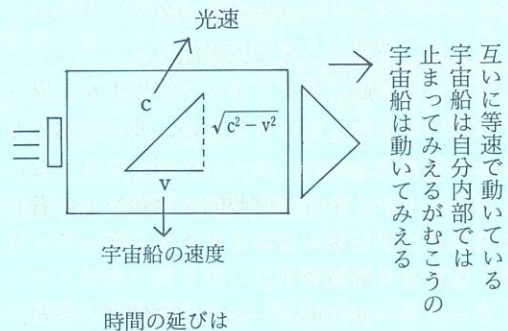
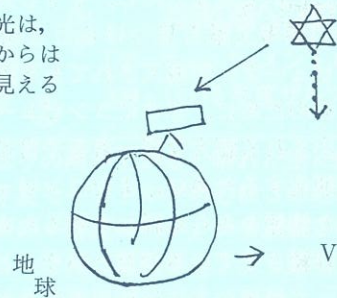
アインシュタインは

その時

別荘づまい

50才

星の光は、地球からは斜に見える



$$\frac{\sqrt{c^2 - v^2}}{c} = \sqrt{1 - \frac{v^2}{c^2}}$$

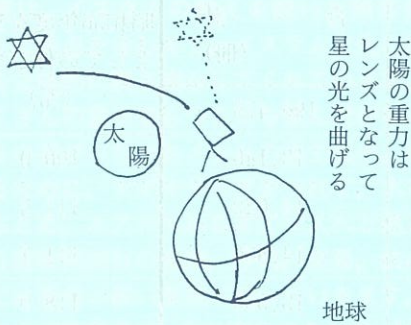
あとみよ「^{そわか}早和花」!?!—

少し前に亡くなられた文豪露伴の娘随筆家の幸田文(あや)さんが書いたものの中に「あとみよそわか」があった。

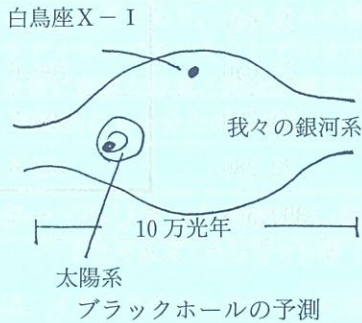
「そうじとはこういう風にするものなんだ」という厳しいしつけを述べた文章だったがこれが長く頭を離れなかったのか書架のほこりがどうにも気になっていた。

意を決して掃除機を買い本の頭にたまっているほこり取りをはじめてみるとそのほこりの多さに

小人はその時 相対性理論の 入口へ至る



宇宙論への応用



ブラックホールは強力な重力が働いてそこから出る光を押し曲げて脱出することを不可能とする

そうじき片手に知求を歩く

は驚かされる。これでは昔多くの結核があったのは当然と思えてくる。

この4月から開架だけでなく手つかずの「書庫にねむる」ほこりに手をつけたが、終えるまでには毎日少しずつの歩みではこの先10年はかかるだろう。

そのつど文さんの「あとみよそわか」とつぶやいてこの歩みを励ましている。図書館という知求を歩くには「そうじき」が一番だ。

アインシュタインはナチの台頭と共にアメリカに逃がれたが、彼がユダヤ人だったために。そこにはあのチャーリー・チャプリンがいた。彼も又ユダヤ人である。心理学者のフロイド。音楽家のメンデルスゾーン。そしてあの『資本論』のマルクスも又そうであるように。

20世紀は2人のユダヤ人「アインシュタイン」と「マルクス」によって開かれたと言ってもよいだろう。彼等はあの「ピュタゴラスの定理」を実質的に生み出した「チグリスーユーフラテスの知恵の民・バビロニア人」のすぐ近くに住んでいた民族を祖先に持っているのである。

「相対性理論」は「自然の中にある時間のしくみ」を解き明かしたが、『資本論』は「社会の中にある時間のしくみ」を解き明かした。「剰余価値はヨコの売買関係からは産み出されない。それはタテの労働過程の中にかくされている」。要約すればそういうことになる。

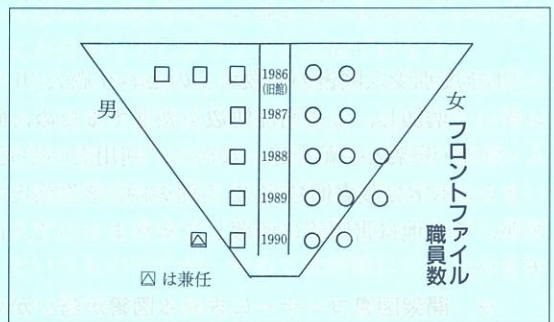
アインシュタインもマルクスも共に簡単な「公理系」を出発点にそれから諸結果を引き出した。それは頂度山の峰へ登って結論を導びく「帰納法」ではなくて峰から下りてくる「演繹法」である。

この20世紀もあと残すところ9年余。未曾有の戦乱がこの地球を覆いいくつもの暗黒の闇を通り抜けて来た。今ようやく「大正ロマン」が再現されつつあるかに見える。

その時我々は与えられた「啓蒙書」をより創造的に我々のものとしてかみくだく必要に迫られてはいないだろうか。

アインシュタインは20世紀の光であった。彼の創った「魂の光」はモーツァルトの創り出した「魂の光」と同様に我々が登りつづける「知求という名のマッターホルン」であるだろう。

トルストイはかつて『戦争と平和』の中の一民衆人フリーメイソンのプラトンカタラーエフに「難儀一時くらしは一生」と言わしめた。これになぞらえるなら「学校一時知求一生」となろう。



蔵書冊数の推移

—平成3年3月31日現在の蔵書冊数—

総計表 (1)+(2)

	和書	洋書	合計
冊数	321,276冊	109,839冊	431,115冊
和・洋書比率	74.5%	25.5%	100%

(1) 年度別受入図書の冊数表

年度	和書 (冊)	洋書 (冊)	合計 (冊)	昭和56年度を100% としての伸び率 (%)
昭和24年～55年	138,295	58,180	196,475	
56年	8,800	4,340	13,140	100.0
57年	10,700	3,920	14,620	111.3
58年	9,400	5,280	14,680	111.7
59年	11,640	3,860	15,500	118.0
60年	13,360	6,560	19,920	151.6
61年	17,841	6,762	24,603	187.2
62年	15,799	5,198	20,997	159.8
63年	19,640	5,400	25,040	190.6
平成元年	20,820	4,500	25,320	192.7
2年	17,680	4,600	22,280	169.6
合計	283,975	108,600	392,575	

(2) 特別文庫等の蔵書数

文庫名	北駕文庫	戸津文庫	上原文庫	小林文庫	卒業論文	修士論文	合計
和書	31,113	891	2,765	2,197	301	34	37,301
洋書	—	58	606	575	—	—	1,239
合計	31,113	949	3,371	2,772	301	34	38,540

『(1)年度別受入図書の冊数表』のとおり過去10年間の受入図書推計によると近年の受入図書は凄まじい勢いで増加し、この増加冊数を整理するため、館長をはじめスタッフ20名が、一丸となって選書・受入・整理・開架と手順を追いながら「利用者の手元に一刻も速く」をモットーに日々努力しております。

また、本学の蔵書冊数約43万冊の内、学生諸氏の目に触れる図書は開架図書の約5万冊程度であります。また、その他は書庫等に所蔵してありますので、目録カード等で検索して必要な図書を閲覧係にお尋ね下さい。

※ 開架図書コーナーに求める図書が無いからと決して諦めないで!

マホメット

アンヌ＝マリ・デルカンブル著

五十嵐 一監修 小林 修訳

創元社「知の再発見」双書 05, 1990

著者のいかにもフランス人らしいエスプリの効いた著述をこの一冊から味わってみてはいかがでしょう？

本書は、イスラムの教えを説いた預言者マホメットに焦点を合わせて、イスラム文化の成立と展開を立体的に説き明かしてくれています。

たくさんの子をもつことを望んだがゆえに、何人もの妻がいたマホメットの実生活や、砂漠で生きるために、ヤギやラクダをつれて、水と牧草地をもとめ、オアシスからオアシスへと絶えず移動する遊牧民固有の規律、序列、交易、法のしくみなどに著者の鋭い筆致が迫っていきます。

たとえば監修者は、その序文のなかで、『ラディカルなイスラムにラディカルに迫る書物』と述べていますが、原点にさかのぼって考えることが何事においても必要であり、イスラムの教えもその限りでラディカルであったとしています。

本書全体に豊富な写真、図版が織り込まれているので、視覚的にも十分たのしめることでしょう。

「ドクター・ヘリオットのおかしな体験」

ジェイムズ・ヘリオット著 (文春文庫)

これは、イギリスのヨークシャーに住む著者が新米の獣医として、その地に来た当時(第二次世界大戦前後)の生活を想起して物語風に綴った作品です。

著者を取り巻く町の人、獣医仲間、そして何とんでもなく彼が診る動物達が彼の言葉を通して、こちらに語りかけてきて、リアルタイムに不思議なおかしさをこみあげさせてくれます。著者の、シンプルで人間味のある人柄が、いつの時代でも、どこにいても変わらない何か、暖かく伝わってくるのが、とても心地良い作品です。

この本には、別のタイトルで続編の様な作品もありますが、最初に出されたこの一冊が何とんでもなくお勧めです。読み始めたらずいまでつき進んでしまうこと請け合いです。

ジョンとヨーコ ラストインタビュー

デービッド・シェフ著 オノ・ヨーコ監修

1990 集英社

この本を見て、ふと気付いたことがある。それまでは余りに気にならなかったのだが、1960年代後半から1980年までのジョン・レノンの写真で、ある事に気付いたのだ。それは、ジョンが、その時代時代の風俗そのままに髪・髭を伸ばしていた時、そしてその後短く刈った時、いつもその顔には同じ丸形の眼鏡がかかっているではないか！僕は、ジョン・レノンについて、いつも変化を求め、新しいものを求めていた人という印象を持っていた。それがビートルズであり、オノ・ヨーコだと思っていた。それは、ある面では正しいかもしれない。しかし、眼鏡に関しては間違っていたようだ。ウーム。こうなるとフツフツと疑問は湧いてくる。彼は、最初からこの眼鏡を選んだのだろうか。眼鏡は一つしか持っていなかったのか。ポストンタイプの眼鏡は持っていなかったのか……。でもどんな恰好をしていても似合っているから、まあいいのかな。

靴に本だけつめこんで

群ようこ著 新潮社 1987

「何かおもしろそうな本無いかな？」って時、どうやってみつめますか？ 私はたいてい書評にたよっちゃいます。そうです。私が薦めるこの本も読書案内の本なのですが、ただの読書案内と思っただけではいけません。紹介されている24冊の名著の著者独特の解説がものすごく面白いだけでなく、この本を読めば著者「群ようこ」が、どんな人間で、どんな歴史を持ち、どんなものが好きで、どんなふうになりたいと考えているかが、いつのまにか分かってしまうように出ています。

すぐれた書評が、メインディッシュを引きたたせる前菜だとすれば、この本は一品料理としても立派に通用させながら、さらにメインディッシュへの期待感を高める見事な料理に出来上がっています。いま書いているこれも恥ずかしながら書評というものですが、せめて食前酒になれたらうれしいな!!

◆ 経済関係 ◆

- 貨幣理論の形成と展開 奥山忠信著 1990
- プライベートイゼーション 林堅太郎著 1990
- 経済政策の基礎分析 横井弘美編 1990
- 比較経済研究 田畑理一著 1990
- グローバリズムの国際政治経済学 石原孝一編著 1990
- 政策協調の経済学 石井菜穂子著 1990
- 世界経済と南北問題 内田勝敏編著 1990
- 国際援助ビジネス 毎日新聞社会部ODA取材班著 1990
- 社会的経営理念 野藤忠著 1990
- アメリカ企業の史的展開 丸山恵也編著 1990
- 日本の経営の系譜 間宏著 1989
- 経営学概論 川口義博著 1990
- 戦後日本の中小企業政策 有田辰男著 1990
- 為替理論と内国為替の歴史 安倍惇著 1990
- 日本の株価・地価 西村清彦編 1990
- 証券市場の基礎知識
山一証券経済法令研究会研究所編 1990
- 国際収支と為替レートの基礎理論 天野明弘著 1990
- 新しい産業心理 西川一廉著 1990
- 規制緩和の経済理論 経済企画庁総合計画局編 1989
- システム農学 岸根卓郎編著 1990
- 食料戦略と地球環境 矢口芳生著 1990
- 食糧経済 岸根卓郎著 1990
- 現代の流通経済 伊藤允博著 1990
- イギリス会計基準書 田中弘訳 1990
- 会計学辞典 森田哲彌編著 1990
- 日本の地方鉄道網形成史 武知京三著 1990

◆ 法律関係 ◆

- 概説現代日本の政治 阿部斉著 1990
- 情報公開 制度化への課題 総務庁行政管理局監修 1990
- 選挙法百年史 自治省選挙部編 1990
- 政治参加と投票行動 三宅一郎著 1990
- ドイツ社会民主党史序説 安世舟著 1990
- 公務員懲戒の研究 中村博著 1990
- 日本の政府関係 S. R. リード著 1990
- 分析法学と現代 八木鉄男著 1989
- 解説世界憲法集 樋口陽一編 1988
- 注解行政事件訴訟法 園部逸夫編 1989
- 現代スイス憲法 小林武著 1989
- 任意代理基礎理論 伊藤進著 1990
- 口述契約・事務管理・不当利益 田山輝明著 1989
- 合名会社社員責任論 田中耕太郎著 1989
- 刑法における故意・過失の研究
K. エンギッシュ著 1989
- 共犯論再考 大越義久著 1989
- イギリスにおける罪と罰 柳本正春著 1989
- ドイツおよびECにおける経済犯罪と経済刑法
K. ティーデマン著 1990
- 日本の法律事務所
日本弁護士連合会弁護士業務対策委員会編 1988
- 西独民事訴訟法の現在 P. アーレンス編 1988
- 技術取引契約の実務 根岸哲編 1990
- アメリカ著作権法 D. A. ワインスティン著 1990
- 国際企業法の諸相 B. グロスフェルト著 1990
- 刑事司法の国際化 森下忠著 1990
- 判例教材刑事訴訟法 三井誠編 1989
- 企業合同法の研究 大隅健一郎著 1989
- 株式の持合と企業法 中島修三著 1990
- クレジット法の理論と実際 中坊公平編
- 社会階層と政治 今田高俊著 1989

案内

◆ 工 学 関 係 ◆

- 知的制御システム 竹垣盛一著 1990
- 難加工材の切削・研削・ドリル加工 鈴木節男著 1990
- わかりやすい真空技術 日本真空協会関西支部編 1990
- 産業火薬 日本産業火薬会資料編集部編 1990
- 日本木工技術史の研究 成田寿一郎著 1990
- ボーダーレス日本の大変貌 矢田晶紀著 1990
- 交通工学 卷上安爾著 1990
- 薄膜のプロセッシング 井上知泰著 1990
- ノイズによる誤動作と対策 酒井洋著 1990
- VLSIプロセス装置ハンドブック 前田和夫著 1990
- 100万人のファジイ 戸貝方規著 1990
- コンピュータウイルス対策基準解説書
通商産業省機械情報産業局監修 1990
- 視覚パターンの処理と認識 舟久保登著 1990
- ソフトウェアの論理的設計法 野口健一郎著 1990
- 数学の冒険 I. スチュアート著 1990
- 電磁気学 川田重夫著 1990
- 新しい物性 石原明著 1990
- 潮目の科学 柳哲雄編 1990
- 応用ファジイシステム入門 寺野寿郎編 1989
- 土の力学 河野伊一郎編著 1990
- 土の力学挙動の理論 村山朔郎著 1990
- すぐに役立つ土木工事の施工計画と見積り
宮原春樹著 1990
- 建築基礎工学 山肩邦男著 1990
- パソコンで解く水理学 池田裕一編 1990
- 自然の浄化機構 宗宮功編著 1990
- 地球環境論 和田武著 1990
- 図解実践ツーバイフォーの施工 青山正昂著 1990
- 鉄筋コンクリート造建築物の寿命 福島敏夫著 1990

◆ 教 養 関 係 ◆

- 知的自由と図書館 塩見昇著 1989
- 世界大催事記 1991 (1991~1993) 1-5 1990
- フッサール研究 小林利裕著 1990
- 心理学キーワード 田島信元編 1989
- 天皇代替り儀式の歴史的展開 岩井忠熊編 1990
- 日ソ外交事始 藤野順著 1990
- ドラマ ソ連史 全2巻
M. シュトロープ著 1989-1990
- 政策過程 大獄秀夫著 1990
- 現代韓国への視点 鄭章淵著 1990
- ウイルソンの国際社会政策構想 草間秀三郎著 1990
- 法学・哲学論集 H. L. A. ハート著 1990
- 株式会社法 長浜洋一著 1990
- 東欧ビジネス戦記 小野宏著 1990
- ソ連・東欧ビジネス事情 赤沼貢著 1990
- ベレストロイカと歴史像の転換
R. W. デイヴィス著 1990
- マルクスの誤算 林健太郎 [ほか] 著 1990
- ヨーロッパ社会主義はいま 朝日新聞取材版編 1990
- 社会福祉援助技術総論 岡本民夫編著 1990
- サハリンと日本の戦後責任 高木健一著 1990
- 脳の進化 J. C. エックルス著 1990
- ドイツ工業とナチズム 鎗田英三著 1990
- 地球環境と人間 A. ナダカブカレン著 1990
- 90年代の石油支配 E. N. クレイベルズ著 1990
- ビジネス成功英文レターが書けるマガジン Book
秋澤公二著 1990
- デザインマインドカンパニー C. ロレンツ著 1990
- 「文藝春秋」にみるスポーツ昭和史 全3巻
文藝春秋編 1988
- 日本語の用例採集法 見坊豪紀著 1990
- 額田王の暗号 藤村由加著 1990

夢風人 ②

— ロシア大使の
ガリツインの (1720-'92)
のみたモーツァルト —
ちよつとマチネエ
モーツァルトさん

1781年の夏、ウィーン郊外ハイリゲンシュタットに狩猟館を持つアウガルテンはこのほか華やいでいた。ザルツブルクと決別したモーツァルトがその「自由の鐘」を高らかに鳴り響かせたのだ。

ウィーンの森は運河を渡り北東を流れるドナウの本流に沿って広がる広葉樹と針葉樹の混合林である。ここではよくイノシシ狩りが行われアウガルテンはその基地のような役割を果たしていた。

モーツァルトはここで「マチネコンサート」を開いた。「マチネ」とはフランス語で「昼の演奏会」の意である。そこで演奏された「セレナード 10 番 グラン・パルティータ K 360」は別名「13 管楽器のためのセレナード」として知られている。オーボエ 2 本、ファゴット 2 本、フルート 2 本、コントラバスを真中にホルン 4 本、クラリネット 2 本からなるこの曲はまさしく「グラン・パルティータ」(大きな狩)の名にふさわしい。

私はおもわずロシアの森での狩を思い出した。この種の音楽をボヘミアの作曲家たちが得意としていた。なかでもロマンティック街道はミュンヘンに近いヴァラーシュタイン宮廷で活躍したロゼッティ(レスラー)は狩の音楽を多く作曲した。彼らはホルンの響きを音楽の中心に据えていたのであった。

この 60 分にも及ぶ交響曲をしのぐ曲の中にモーツァルトは「ロマンティック街道」の希望に満ちた思い出を挿入している。

ボヘミアの作曲家シュターミツツ一族が中心のあのマンハイム滞在中にモーツァルトはオランダのアマチュア演奏家ド・ジャンの依頼で作曲しておいた「フルート四重奏曲 K 追加の 175」(1778 年冬マンハイム)の主題を繰り返して展開しているのはやはりあの当時の夢が忘れられなかったのだろうか。失意が訪れる前の希望に満ちた冬の日々であったようだ。

この曲を境にモーツァルトは野の人となり「音の狩人」として新転地をこのウィーンに見出すことになった。

モーツァルト

楽

天

花

時
芽
季
の
ツ
ア
ル
ト
②

虹織草

にじ おり そう

—はるかなる
自由の国への憧れとして

「ディヴェルライメント 17 番 K 334」(1779 年度ザルツブルク)

どしゃぶりの雨が上がると晴れた空に虹がかかると。1779 年夏モーツァルトの心にこの虹がよみがえった。あの「苦夏のパリ」から頂度 1 年がたった。新しい作曲へ意欲がようやく湧いてきたのである。

「交響曲 33 番 K 319」につづいて作曲した「セレナードポストホルム K 320」は「自由への憧れ」を駆通馬車の鳴らすホルンに託しているかのようだ。「ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲 K 364」は「失意のロマンティック街道」をめぐる父と子の切々とした問答のようにみえる。

これらの名曲の中にひとときわ輝くのは「ディヴェルライメント 17 番 K 334」ではないか。

ディヴェルライメントはセレナードと共にモーツァルトが多く書き残した分野だがおしなべてそれは祝典の音楽であり、「気ばらし」の意をこめて

親しかった貴族ロドロン伯爵の依頼で婚儀のために作曲されたこの曲には喜びというよりも、むしろ全曲に「ロマンティック街道への愁」がよみとれる。それは母への追悼の調べだったともとれる。

ホルン 2 本、弦 4 本からなるこの編成はのちにモーツァルトが父の死に際して作曲したとされる「アイネクライネナハトムジーク K 525」(1787 年ウィーン)と対立をなす「村の楽土の六重奏曲 K 522」と同じ編成である。

田園光響曲

$$\sqrt{1 - \frac{v^2}{c^2}}$$

=5000年の奇遇

——時を結ぶ人
モーツァルト

啓
芽
季
の
モ
ー
ツ
ァ
ル
ト

②

楽
天
知

時計の針は60刻みで進む。この単位を創り出したのはほかでもないバビロニアの人たちである。

そうこうするうちにモーツァルトはバビロニアの書記たちが大切に持っている一つの数表に出会った。それは三列からなっていて、 $\frac{a^2}{c^2}$ 、a、bの辺の値がそれぞれタテに刻られていた。もちろん60進法によって。

彼らはなんのためにこの表を作ったのかを説明して「それにピタゴラスの数つまり各辺が整数となるような完全数を求めた」が故であった。

それを式で表わすなら

$$a^2 + b^2 = c^2$$

この両辺を c^2 で割ると

$$\frac{a^2}{c^2} + \frac{b^2}{c^2} = 1$$

となる。

これは何を意味するのか。それは斜辺を1とした三角形を作図せよということになる。こうして彼らは完全数を $2PQ$ 、 $P^2 - Q^2$ 、 $P^2 + Q^2$ として求めたのである。

ところがモーツァルトはこれらの式がどうにもあのアインシュタインの「相対性理論」の中の「特殊相対性理論」の解に用いられる方程式

$$\sqrt{1 - \frac{v^2}{c^2}} \quad (c \text{ は光速, } v \text{ は物体の相対速度})$$

とあまりにも似ていることに気づいた。

用いられる仕方は異なっていたものの奇しくも5000年を経て同じ方程式が出会ったわけである。

バビロニアの人たちは相対性理論をただちに理解した。なぜならピタゴラスの知恵の祖の故に。

——モーツァルト
忘れ得ぬ
人々より
もう一人のハイドン
——自由と忍従との友情話 ②

アマデウス
交遊録

真珠をちりばめたようなザルツブルクのどこがモーツァルトの気に入らなかったのか。それは辺境の街にひそむ俗物たちの故であったろう。

そうしたなかにもモーツァルトは気心の知れた友もいたのである。その人の名はパパハイドンの実弟ミヒャエル・ハイドンである。

1783年夏、モーツァルトは妻コンスタンツェを伴ってザルツブルクに里帰りした。楽しい日々をすごしたが、気になったのはハイドンが病気がちで宮廷から依頼された6曲の「ヴァイオリンとヴィオラのための二重奏曲」のうち2曲の筆が進まないことであった。

モーツァルトは彼に代わってその2曲を作曲し、ミヒャエル・ハイドンの窮状を救ったのである。この2曲の「ヴァイオリンとヴィオラのための二重奏曲K 423、K 424」をハイドンは友情の記念として持っていたという。

帰路は秋色濃いドナウ河畔の町リンツに立ちより当地の貴族トーン伯邸に滞在した折、演奏会を所望されたモーツァルトはわずか4日で『交響曲リンツK 425』を書きあげた。第2楽章のメヌエットで高らかに歌うオーボエの調べこそドナウのほとりに咲いた「風礼愛草」とも「瀬月草」ともいふべき田園牧花である。

しかし、演奏会はこの一曲では物足りなかったもので、モーツァルトは携行していたミヒャエル・ハイドンの「交響曲」に「序曲」をつけて演奏した。この曲が今日「交響曲37番K 444」として知られているものである。

真珠のようなザルツブルクの街はやがて1800年になるとフランス軍が攻め込んで破壊されてしまった。ミヒャエル・ハイドンの財意も又失われたという。その中にあのモーツァルトの2曲の作品が含まれていたのかもしれない。

自由を求めてザルツブルクを去ったモーツァルトに対してザルツブルクで苦難と忍従の日々を送ったミヒャエル・ハイドンは1806年この世を去った。

省エネ考(その二)

小坂直人

同じ目的を達成するにしても、効率の高い機器を使用するのとしないのではエネルギー消費の水準が大きく異なってくる。家庭で用いられる電化製品も冷蔵庫やテレビをはじめとして、単位当たりの消費電力は大きく低下してきており、一般に新型の製品はそれだけ効率的になったといえよう。国産乗用車の平均燃費も、1982、3年頃までは明らかに改善が進み、10モード燃費で13km/ℓを示すまでになっていた。

ところが、一方で機器の単位当たりエネルギー消費量の削減を実現しても、他方で機器の大型化、高級化が進むことによって、トータルとしてのエネルギー消費が増大するという現象が生まれてくる。'80年代末期の我国のエネルギー消費の増大、特に民生用エネルギー増大の原因の一つとして、この点は注目されるべきである。「省エネ」という考え方は、エネルギー消費機器一台当たり、あるいは単位出力当たりでどれだけ改善されたかという点だけではなく、それらの機器全体として消費されるエネルギーがどれだけ削減されたかを見る必要がある。単位出力当たりの効率化が大型化や大量普及で帳消しにされる恐れがあるからである。この点では、生産メーカーの責任は重大である。製品の大型化や高級化が消費者の側から求められているが故になされるのか、製品を売らんがためになされるのか、「卵が先か鶏が先か」に似たような議論になりかねないが、メーカーにとっては需要の先取が大事なのであり、したがって、新製品を世に送り出すことによって消費者の欲求を顕在化させることが市場開拓成功の鍵を握っているのである。この意味で、企業の販売政策が浪費を誘う

構造になっていないかどうかの点検がどうしても必要となる。電気を売ることを商売にしている電力会社も、ピークロードのカットのために、どこまで「電力消費推進」が許されるのか、一度考えてみる必要がある。

いずれにしても、用いられる機器の効率化はそれ自体として極限まで追求する必要があるが、同時に、この成果を台なしにしないような条件を整えていくことも求められている。暖房機器の省エネに成功しても、容れ物(家屋)自体の断熱化が十分でなければ、効率化にも大きなマイナス要因となるのは目に見えている。

同時に、近年の特徴として、運輸部門におけるエネルギー消費が増大化傾向を示し、また、自動車交通においては、道路を中心とした社会資本の整備のおくれから、渋滞現象が顕著になり、その面からも浪費の指摘がなされている。この点は、鉄道交通システムを含め、社会的な交通手段の整備の問題として、緊急な解決が求められているといえる。

全体として、機器単体あるいは単位当たりにおけるエネルギー消費の削減は、常に機器の総数や大型化との関わりで議論されなければ一面的となること、そして、エネルギー供給、消費がシステム全体としてどのように機能しているか、という視角をもたなければならないということである。この点を正確におさえておかないと、個人個人は省エネに成功しているように見えても、全体としては反対の結果を導くことがあるのを見すごすことになるからである。

(こさか なおと 経済学部教授)

北海学園大学附属図書館報 図書館だより Vol.13 No.2.(通巻118号)

本館 〒062 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 工学部分室 〒064 札幌市中央区南26条西11丁目
☎(011)841-1161 本館内線 270~275・279 工学部内線 813・814